

# キャリア教育特別設計講義の教育効果

原 瑞穂 (キャリア支援センター特命准教授)

## 1. はじめに

### 1-1. 問題と目的

本研究<sup>1)</sup>で扱う授業「地域で活躍する職業人に学ぶ」は、「香川大学におけるキャリア教育特別設計講義」として2015年度に開設・開講され、本年度で7年目となる。開設趣旨は、初年次学生に対する就労意識の醸成をはかるとともに、県内の企業等への関心と認知を高め、県内就職者拡大につなげることをねらいとするものであり、香川県と香川大学が連携した県内大学生向けキャリア教育推進事業である。授業では、香川大学の全6学部に関係する職業分野から、地域で活躍する職業人を招いて計5回の職業事例講話を実施するなど、特別のカリキュラムを設計している。

大学のキャリア教育において、社会人講話を取り入れているケースは多い。社会経験の少ない学生が社会で活躍する社会人の経験を聞くことによって、初年次からキャリアに関する意識を高め、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく」(文部科学省、2011)力を身につけることがねらいであろう。そのような授業の効果検証については、最近では吉田・原田(2018)が、社会人から仕事や職業についてのリアルな話を聞くことによって、大学生の職業キャリア・レディネスの計画性が高まることを報告している。また、川合(2021)は、高校生に対する社会人講話の効果を検証し、講話を聴くことが生徒のキャリア発達に影響を与えていることを報告している。原(2021)も大人数の社会人講話の授業において、学生の自尊感情や自己効力感が向上したことを報告している。しかし、授業はそれぞれ構成も担当も受講生も変化するために、ある授業の効果がそのまま別の授業でもそうであるとは限らない。やはり、携わる授業ごとの検証が授業改善のためには必要であろう。本授業においても、授業効果を測定するためのアンケートを実施し、自己理解の深まりと県内就職を目的としたキャリア教育プログラムの効果検証を行い、授業運営を検討した。

### 1-2. 本研究の概要

本授業が香川県からの受託事業であり、県内への就職者数向上を先の目標として開講されたものであるため、本研究は、事業の趣旨に基づいた観点から評価を行うことを第1の目的とした。また、初年次のキャリア教育の観点から、本授業を受講した学生の受講前後の心理的变化をもとに、授業の効果を定量的に検討することを第2の目的とした。また、本授業では、県内で活躍する職業人の講話を聞くことでキャリア形成のヒントが得られる

とともに県内就職への希望度が高まると予想した。受講による効果を高めるために、堀(2013)のOPPA(One Page Portfolio Assessment:1枚ポートフォリオアセスメント)を使用した。これは、学習によるメタ認知育成を促し自己効力感を高めるツールであり、先行研究ではその効果が得られている(原、2019)。

## 2. 方法

### 2-1. 本研究で扱う授業概要

#### (1) 授業の目的

本授業は、キャリア教育において重要なテーマである「自己理解」を促し、自律的なキャリア形成の第一歩とすることを第一の目的とした。また、学生の県内の企業等への関心と認知を高め、県内就職希望度を高めることも第二の目的であった。

#### (2) 授業の内容

本授業は、前期の前半を1クォーター、後半を2クォーター(以降Qと表記する)として2回開講し、各全8回で実施した。授業は1名の教員で行った。各授業は60～180名の履修人数であった。表1に授業の構成を示す。

表1 特別設計講義の授業構成

回	1Q		2Q	
	実施日	内容	実施日	内容
第1回	4月12日	香川県労働政策課講話、倫理について	6月14日	香川県労働政策課講話、倫理について
第2回	4月19日	キャリアデザインについて	6月21日	キャリアデザインについて
第3回	4月26日	〇〇信用金庫 講話	6月28日	株式会社〇〇(食品)講話
第4回	5月10日	〇〇合同会社 講話	7月5日	香川県農業生産流通課 講話
第5回	5月17日	香川県〇〇保健所 講話	7月12日	香川県教育委員会 講話
第6回	5月24日	株式会社〇〇 講話	7月19日	〇〇株式会社(起業家)講話
第7回	5月31日	〇〇工業株式会社 講話	7月26日	〇〇株式会社(小売業)講話
第8回	6月7日	まとめ	8月2日	まとめ

#### (3) 授業運営と環境への配慮

グループワークの時間を設け他者との交流による考えが深まるように構造化した。新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため1Qは4回目からオンライン授業になったが、リアルタイム配信により内容に差が出ない配慮をした。オンライン授業に移行した際は、Moodleを使用して資料や課題提出を行った。感染防止対策としてグループワークは数人単位、短時間でを行った。

### 2-2. 研究の方法

#### (1) 調査対象者と実施時期

2021年4月～8月に、本学でキャリア教育特別設計講義を履修した者。

#### (2) 手続きと倫理的配慮

授業時間中に、キャリア観や県内就職の意識に関するものと心理尺度を用いた学生の自己評価に関する2種類のアンケート調査を実施した。1Qの第1回目は2講の授業時に質

問紙を配布し記入後回収した。2回目の8講目はオンライン授業であったため、Web上から回答させる形をとった。2Qも方法を揃えるためにWeb上から回答させた。所要時間は15分程度であった。回答用紙およびWebのアンケートには、無記名で記入させ、個人が特定されないよう配慮をした。倫理的配慮として任意回答、協力の自由意志などの記述をし、口頭及び書面で説明をした。

### (3) 調査内容

キャリア観や県内就職の意識に関するアンケートの内容は、働き方や生き方のイメージ化、キャリア形成やその準備の具体化、香川県内就職希望度、授業満足度(2回目)であった。心理尺度を用いた学生の自己評価に関するアンケートは6心理尺度を使用し、本研究ではその内の3尺度を分析に使用した。尺度は以下に示す。

#### a) 自尊感情

Rosenberg(1965)の自尊感情尺度の日本語版である、山本・松井・山成(1982)の自己評価の尺度10項目を使用した。「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を5点とする5件法で評価させた。

#### b) 自己効力感

一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野・東條、1986)16項目を使用した。Bandura(1977)は、自己効力感の向上に、遂行行動の達成、代理体験、言語的説得、情動的喚起の4つの方法を挙げている。本授業では代理体験を主に用いた。「Yes」を1点、「No」を0点とする2件法で評価させた。

#### c) 進路選択に対する自己効力(短縮版)

進路選択に対する自己効力尺度(浦上・脇田、2016)10項目を使用した。この尺度は、大学・短大生の、進路選択行動に関する自己効力感を測定するものである30項目(浦上、1995)の短縮版である。「全く自信がない」を1点、「非常に自信がある」を4点とする4件法で評価させた。

## 3. キャリア観や県内就職の意識に関するアンケート結果

1Qの授業の履修者は179名、2Qの履修数は60名であった。履修者と回答者との内訳が異なっていたが、許容範囲の誤差とみなしその後の分析を行った。

### 3-1. 回答者

1Qの1回目の回答者数は172名であった(回収率96.1%)。学年では、1年生が164名で多く、学部では医学部が77名で多く、出身地では香川県が50名でそれぞれ多かった。2回目の回答数は176名であった(回収率は98.3%)。学年では、1年生が166名で多く、学部では、医学部が80名で多く、出身地では、香川県が51名でそれぞれ多かった。

2Qの1回目の回答者数は55名であった(回収率91.7%)。学年では1年生が51名で多く、

学部では創造工学部が17名で多く、出身地では、香川県が13名であった。2回目の回答数は53名であった（回収率は88.3%）。学年では、1年生が50名で多く、学部では創造工学部が17名で多く、出身地では香川県が14名でそれぞれ多かった。内訳を表2に示す。

表2 回答者内訳

			性別		年齢					学年				学部					香川県内外			合計	
			男性	女性	18歳	19歳	20歳	21歳	22~	1年	2年	3年	4年	教育学部	法学部	経済学部	医学部	創造工学部	農学部	県内	県外		不明
1Q	1回目	人数	—	—	—	—	—	—	—	164	5	2	1	13	2	38	77	32	10	50	122	0	172
		%	—	—	—	—	—	—	—	95.3	2.9	1.2	0.6	7.6	1.2	22.1	44.8	18.6	5.8	29.1	70.9	0	100
1Q	2回目	人数	80	96	91	49	15	7	14	166	6	3	1	13	2	37	80	35	9	51	125	0	176
		%	45.5	54.5	51.7	27.8	8.5	4.0	8.0	94.3	3.4	1.7	0.6	7.4	1.1	21.0	45.5	19.9	5.1	29.0	71.0	0	100
2Q	1回目	人数	31	24	33	18	4	0	0	51	4	0	0	11	1	10	2	17	14	13	42	0	55
		%	56.4	43.6	60.0	32.7	7.3	0	0	92.7	7.3	0	0	20.0	1.8	18.2	3.6	30.9	25.5	23.6	76.4	0	100
2Q	2回目	人数	28	25	26	22	5	0	0	50	3	1	0	11	1	8	2	17	14	14	39	0	53
		%	52.8	47.2	49.1	41.5	9.4	0	0	94.3	5.7	1.9	0	20.8	1.9	15.1	3.8	32.1	26.4	26.4	73.6	0	100

※1Qの1回目は、性別、年齢を聞いていなかったため記載なし。

### 3-2. 働き方のイメージ醸成

「現時点で（講義を通して）働き方や生き方をイメージすることができていますか（できましたか）」について授業前後の比較を行った。1Qの結果は、「まあできている」が1回目の44.2%から2回目の61.4%へ17.2ポイント上昇し、「できている」が1回目14.5%から2回目の34.1%へ19.6ポイント上昇した。2Qの結果は、「まあできている」が1回目の23.6%から2回目の67.9%へ44.3ポイント上昇し、「できている」が1回目1.8%から2回目の24.5%へ22.7ポイント上昇した。この結果から、受講により働き方や生き方のイメージ醸成にプラスの影響があることが示された。結果を表3に示す。

### 3-3. キャリア形成の具体化

「現時点で（講義を通して）大学生活におけるキャリア形成やその準備を具体的に考えていますか(考えるようになりましたか)」について授業前後の比較を行った。1Qの結果は、「まあ考えている」が1回目の42.4%から2回目の54.5%へ12.1ポイント上昇し、「考えている」が1回目6.4%から2回目の39.8%へ33.4ポイント上昇した。2Qの結果は、「まあ考えている」が1回目の21.8%から2回目の66.0%へ44.2ポイント上昇し、「考えている」が1回目3.6%から2回目の26.4%へ22.8ポイント上昇した。この結果から、受講によりキャリア形成の具体化にプラスの影響があることが示された。結果を表3に示す。

表3 1Qと2Qの働き方のイメージの醸成とキャリア形成の具体化

	働き方のイメージ								キャリア形成の具体化							
	1Q				2Q				1Q				2Q			
	授業前		授業後		授業前		授業後		授業前		授業後		授業前		授業後	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
1. 全くできていない	9	5.2	2	1.1	7	12.7	0	0	14	8.1	1	0.6	3	5.5	0	0
2. あまりできていない	62	36.0	6	3.4	34	61.8	4	7.5	74	43.0	9	5.1	38	69.1	4	7.5
3. まあまあできている	76	44.2	108	61.4	13	23.6	36	67.9	73	42.4	96	54.5	12	21.8	35	66.0
4. できている	25	14.5	60	34.1	1	1.8	13	24.5	4	6.4	70	39.8	2	3.6	14	26.4
合計	172	100	176	100	55	100	53	100	172	100	176	100	55	100.0	53	100

### 3-4. 香川県内就職希望度（全体）

「大学卒業（新卒）時点の就職での香川県内の企業・団体・行政機関等も選択肢となりえますか」について授業前後の比較を行った。1Qの結果は、「まあなりえる」は1回目の29.7%から2回目の41.5%へ11.8ポイント上昇し、「なりえる」が1回目22.7%から2回目の26.7%へ4.0ポイント上昇した。2Qの結果は、「まあなりえる」は1回目の29.1%から2回目の49.1%へ20.0ポイント上昇し、「なりえる」が1回目27.3%から2回目の26.4%へ0.9ポイント減少した。1Q、2Qともに受講前に比べて、受講後は香川県内就職を視野に入れてもよい、あるいは視野に入りたい、という積極的な県内就職への意識の変化が見られた。この結果から、受講により県内就職にプラスの影響があることが示された。しかし、2Q2回目の「まあなりえる」が20.0ポイント上昇したものの、「なりえる」が0.9ポイント減少しており、肯定的な反応は2Qに多く見られたが、積極的に考えている者が減少した。結果を表4に示す。

表4 1Qと2Qの県内就職を考えている者（1回目と2回目の回答数の比較）

	1Q				2Q			
	1回目		2回目		1回目		2回目	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0. 分からない	37	21.5	18	10.2	13	23.6	4	7.5
1. なりえない	16	9.3	10	5.7	2	3.6	4	7.5
2. あまりなりえない	29	16.9	28	15.9	9	16.4	5	9.4
3. まあなりえる	51	29.7	73	41.5	16	29.1	26	49.1
4. なりえる	39	22.7	47	26.7	15	27.3	14	26.4
合計	172	100.0	176	100.0	55	100.0	53	100.0

### 3-5. 香川県内就職希望度（地域別）

香川県内就職希望度の項目を出身地域別に項目得点の平均値を比較した。得点は、「分からない」「なりえない」「あまりなりえない」「なりえる」を0点から4点で計算した。

1Qの結果は、1回目は、長崎県、奈良県、香川県の順に高く、2回目は、長崎県、和歌山県、茨城県と県外の方が高かった。希望度の上昇している都道府県が多かったが、低下していたのは東京都、奈良県、広島県、沖縄県であった。この結果から、受講後の県内就職の希望度は県外出身者の方が高いこと、受講後には希望度は概ね上昇しているが、受講によって希望度を下げる者もいることが示された。さらに、1回目と2回目の意識の変化を項目ごとに検証した結果（性別と年齢は1回目のデータがないため比較はできない）、全体では1回目2.23から2回目2.69に香川県希望度が向上していた。1年、2年、3年、全学部で向上が見られた。細部を見ると低下している項目もあるが、個人の変化である可能性が高く、全体として本授業の目的は概ね達成されたと考えてよいであろう。

2Qについては、受講人数に偏りがあるために、今回は分析から外した。結果を表5に示す。

表5 1Q項目別の香川県内就職希望度平均値の比較

		1Q		1Q		1Q					
		前	後	前	後	前	後				
性別	男性	—	2.73	北海道	北海道	2.00	2.50	中国	鳥取県	0.00	2.00
	女性	—	2.66	東北		—	3.00		島根県	1.00	1.00
年次	1年	2.25	2.70	関東	茨城県	0.00	4.00		岡山県	1.61	2.45
	2年	2.00	2.67		埼玉県	—	4.00		広島県	2.83	2.75
	3年	1.50	2.33		千葉県	—	3.00		山口県	2.00	2.00
	4年	—	2.00		東京都	2.33	1.50	四国	徳島県	2.75	2.88
年齢	18歳	—	2.76		神奈川県	2.00	3.00		香川県	3.02	3.18
	19歳	—	2.61	中部	静岡県	2.00	3.00		愛媛県	1.91	2.40
	20歳	—	2.73		愛知県	1.00	1.80		高知県	2.29	2.57
学部	教育	2.00	3.00		富山県	—	—		福岡県	1.33	3.33
	法学	2.00	2.50	近畿	三重県	1.00	1.00		長崎県	4.00	4.00
	経済	1.97	2.32		京都府	1.75	2.75		大分県	2.00	2.00
	医学	2.35	2.80		大阪府	1.88	2.44	九州・沖縄	熊本県	0.00	2.00
	創造工	2.22	2.69		兵庫県	2.25	2.50		沖縄県	2.00	1.50
	農学	2.60	2.78		奈良県	3.50	1.50		鹿児島県	—	—
					和歌山県	3.00	4.00	合計		2.23	2.69
学科	学校教育	2.00	3.00								
	法学	2.00	2.50								
	経済	1.97	2.26								
	医学	2.34	2.89								
	看護	1.50	3.00								
	臨床	2.80	2.00								
	創造工	2.22	2.69								
	農学	2.60	2.78								

## 3-6. 講義の満足度

「全体を通して講義の内容は満足いくものでしたか」の、1Q2Qの比較を行った。その結果、「まあ満足した」と「満足した」の合計は、1Qが98.3%、2Qが96.2%であった。各項目別の平均値は1Qが3.43、2Qが3.46であり、満足度の高さが見られた（表6）。

表6 1Qと2Qの授業満足度（2回目アンケートの回答）

	1Q		2Q	
	人数	%	人数	%
1. 満足していない	1	0.6	0	0.0
2. あまり満足していない	2	1.1	2	3.8
3. まあ満足した	93	52.8	24	45.3
4. 満足した	80	45.5	27	50.9
合計	176	100.0	53	100.0

項目別では、1Qは、年齢の高い方、男性、法学部、2年生、茨城県、埼玉県、長崎県が高かった。香川県出身者より他県出身者の満足度が高く、県内出身者の定着をねらうのであれば、改善の必要がある。2Qは各項目数に偏りがあるために、検証はしていない。

## 3-7. 学部ごとの講義効果の比較

前段で経済学部が他学部と比べて結果が低いことを受け、学部ごとの傾向の差を詳細に調べるために、働き方、キャリア形成、香川県内就職希望度の1Qの1回目と2回目の得点の一要因分散分析を行った。2Qは回答者の学部比率に偏りがあるため分析から外した。



1Qの結果は、1回目の働き方や生き方のイメージの明確化は、経済学部より教育学部・法学部・医学部の方、創造工学部・農学部より医学部の方が0.1%有意 ( $F(5, 166)=23.208, p<.001$ )で高く、キャリア形成の意識や行動は、経済学部より医学部の方が1%有意 ( $F(5, 166)=4.487, p<.01$ )で高かった。香川県就職希望度に有意差は見られなかった。2回目の終了時の働き方や生き方のイメージの明確化は5%有意 ( $F(5, 170)=2.837, p<.05$ )で、キャリア形成の意識や行動は0.1%有意 ( $F(5, 170)=6.021, p<.001$ )で、授業満足度は5%有意 ( $F(5, 170)=2.924, p<.05$ )でそれぞれ経済学部より医学部の方が高かった。香川県内就職希望度は有意差が見られなかった。結果を表7に示す。

表7 1Qの学部ごとの講義の効果の検証

	教育		法学		経済		医学		創造工学		農学		結果	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
現時点で、働き方や生き方のイメージは具体化できていますか	2.69	0.48	3.50	0.71	2.00	0.62	3.18	0.58	2.34	0.75	2.30	0.48	$F(5, 166)=23.208, p<.001$	教育>経済、法学>経済、経済<医学、医学>創造工学、医学>農学
1 回目 現時点で、大学生活においてキャリア形成やその準備を具体的に考えていますか	2.46	0.78	3.00	0.00	2.11	0.69	2.71	0.74	2.31	0.64	2.40	0.52	$F(5, 166)=4.487, p<.01$	経済<医学
大学卒業(新卒)時点の就職では、香川県内の企業・団体・行政機関等も選択肢となりますか	2.00	1.63	2.00	1.41	1.97	1.35	2.35	1.51	2.22	1.48	2.60	1.26	$F(5, 166)=.539, n.s.$	—
10 講義を通して、働き方や生き方をイメージすることはできましたか	3.38	0.51	3.50	0.62	3.05	0.71	3.43	0.63	3.23	0.43	3.00	0.00	$F(5, 170)=2.837, p<.05$	経済<医学
講義を通して、大学生活におけるキャリア形成やその準備を具体的に考えるようになりましたか	3.31	0.48	4.00	0.62	2.95	0.00	3.53	0.57	3.31	0.47	3.22	0.67	$F(5, 170)=6.021, p<.001$	経済<医学
2 回目 大学卒業(新卒)時点の就職では、香川県内の企業・団体・行政機関等も選択肢となりますか	3.00	1.29	2.50	1.08	2.32	0.71	2.80	1.35	2.69	1.02	2.78	1.09	$F(5, 170)=.984, n.s.$	—
全体を通して講義の内容は満足いくものでしたか	3.46	0.52	3.14	0.71	3.50	0.59	3.53	0.50	3.49	0.56	3.56	0.53	$F(5, 170)=2.924, p<.05$	経済<医学

※M=平均値、SD=標準偏差

### 3-8. 講義全体の効果 (2Qの1回目と2回目の平均値比較)

2Qは質問内容をそろえたため、全体の授業前後の平均値の比較が可能となった。そこで、授業効果を調べるため、2Qの1回目と2回目で、働き方や生き方のイメージの具体化、大学生活におけるキャリア形成やその準備を具体化、大学卒業時点の香川県内就職の希望度の平均値をそれぞれ対応のあるt検定により比較した。その結果、全体として働き方や生き方のイメージの具体化については、0.1%の有意差 ( $t(51)=10.100, p<.001$ )、大学生活におけるキャリア形成やその準備は、0.1%の有意差 ( $t(51)=9.739, p<.001$ )、大学卒業時点での香川県内就職希望度は、5%で有意差 ( $t(51)=2.180, p<.05$ )が見られ、受講前より受講後の方が高かった。また、効果量も順に.81、.81、.29であり、働き方や生き方の具体的なイメージと大学生活におけるキャリア形成やその準備が大きな効果、香川県就職希望度が小から中程度のプラスの効果が見られたため、本授業の授業効果が確認されたと考える。結果を表8に示す。

表8 2Q1回目と2回目の平均値比較

	対応サンプルの差		結果
	平均値	標準偏差	
働き方や生き方の具体的なイメージ	-1.000	0.714	$t(51)=10.100, p<.001$ .81 大 前<後
大学生活におけるキャリア形成やその準備	-0.942	0.698	$t(51)=9.739, p<.001$ .81 大 前<後
大学卒業時点の就職の香川県就職希望度	-0.481	1.590	$t(51)=2.180, p<.05$ .29 中 前<後

効果量：0.1小、0.3中、0.5大

## 3-9. 県内外別出身者の効果比較 (2Qの1回目と2回目の平均値比較)

さらに県内外出身者への影響の差を調べるために各授業効果を同様の方法で調べた。その結果、県内出身者は、働き方や生き方のイメージの具体化は1%で有意差が ( $t(12)=-4.430, p<.01$ )、大学生活におけるキャリア形成やその準備は0.1%で有意差が見られ ( $t(12)=-6.743, p<.001$ )、受講前より受講後が高かった。香川県就職希望度は差が見られなかった。県外出身者は、働き方や生き方のイメージの具体化は0.1%で有意差が ( $t(38)=-9.073, p<.001$ )、大学生活におけるキャリア形成やその準備は0.1%で有意差が ( $t(38)=-7.805, p<.001$ )、香川県就職希望度は1%で有意差が見られ ( $t(38)=-3.212, p<.01$ )、受講前より受講後が高かった。効果量は、県内出身者は順に .79、.89、.18 (-) と、働き方や生き方のイメージの具体化と大学生活におけるキャリア形成やその準備が大きな効果、香川県就職希望度が小程度のマイナスの効果が見られた。県外出身者は順に .83、.78、.46 と、働き方や生き方の具体的なイメージと大学生活におけるキャリア形成やその準備が大きな効果、香川県就職希望度が小から中程度の効果が見られた。この結果から、働き方や生き方のイメージの具体化と大学生活におけるキャリア形成やその準備は、県内外とも同程度であったが、香川県就職希望度では県内出身者に小さいマイナスの効果が生じていた。2Qのみの結果ではあるが、講師、講話内容、授業運営など諸条件を検討し、要因を分析する必要がある。結果を表9に示す。

表9 2Qの県内外出身者ごとの1回目と2回目の平均値比較

	県内			県外		
	平均値	標準偏差	結果	平均値	標準偏差	結果
働き方や生き方の具体的なイメージ	$t(12)=-4.430, p<.01$	.79	大 前<後	$t(38)=-9.073, p<.001$	.83	大 前<後
大学生活におけるキャリア形成やその準備	$t(12)=-6.743, p<.001$	.89	大 前<後	$t(38)=-7.805, p<.001$	.78	大 前<後
大学卒業時点の就職の香川県就職希望度	$t(12)=-.617, n.s.$	.18	小 前>後	$t(38)=-3.212, p<.01$	.46	中-大 前<後

効果量：0.1小、0.3中、0.5大

## 4. 心理尺度による自己評価の結果

## 4-1. 分析対象者

1Qの分析対象者数は170名であった(男性81名、女性89名)。年齢は18歳が107名で多く、学年では1年生が161名で多く、学部では医学部が77名が多かった。2Qの分析対象者数は49名であった(男性26名、女性23名)。年齢は18歳が31名で多く、学年では1年生が45名で多く、学部では創造工学部が18名が多かった。



#### 4-2. 各尺度の授業前後の平均値と標準偏差

心理尺度から学生の授業前後の自己評価の変化を検討した。まず、授業前後の各尺度の平均値と標準偏差を算出したところ、全項目で授業後に向上が見られた（表 10）。

表 10 授業前後の各尺度の平均値と標準偏差

尺度	授業前			授業後			
	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	
1Q	自尊感情	170	32.70	6.59	170	34.10	6.97
	自己効力感	170	7.09	3.88	170	7.46	3.60
	進路選択に対する自己効力	170	28.48	5.36	169	30.01	5.20
2Q	自尊感情	49	31.90	6.48	49	33.88	4.93
	自己効力感	49	6.55	3.86	49	7.78	3.92
	進路選択に対する自己効力	49	26.02	5.41	49	29.31	5.66

#### 4-3. 心理尺度の信頼性

まず、使用する心理尺度の信頼性を検証するためにクロンバック  $\alpha$  係数を算出した。その結果、自尊感情、自己効力感、進路選択に対する自己効力は、1Q が順に  $\alpha = 84.2$ 、80.4、92.1、2Q が順に  $\alpha = 83.5$ 、80.7、88.1 が得られ、内的整合性が認められた。

#### 4-4. 各尺度の授業前後の相関

各尺度得点の相関を調べるために、1Q と 2Q でクラス全体と性別による授業前後のピアソンの相関係数を算出した。その結果、全体では 1Q、2Q とともに授業前と後、授業前後ともに全ての項目間の相関が見られた（表 11）。一方、性別では 1Q は性別で大きな差は見られなかったが、2Q の女性で、やや低い傾向が見られたが、次からは分けて分析する必要はない程度であると判断した。結果を表 11 に示す。

表 11 各項目の授業前後の相関関係

1Q	自尊感情	自己効力感	進路選択に対する自己効力	R自尊感情	R自己効力感	R進路選択に対する自己効力	1Q 上段：男性 下段：女性	自尊感情	自己効力感	進路選択に対する自己効力	R自尊感情	R自己効力感	R進路選択に対する自己効力
	自尊感情	—	.61 ***	.37 ***	.65 ***	.52 ***		.32 ***	自尊感情	—	.69 ***	.33 **	.67 ***
自己効力感		—	.40 ***	.58 ***	.72 ***	.34 ***	自己効力感	.52 ***	—	.45 ***	.59 ***	.64 ***	.34 **
進路選択自己効力			—	.37 ***	.37 ***	.60 ***	進路選択自己効力	.44 ***	.38 ***	—	.34 **	.39 ***	.56 ***
R自尊感情				—	.67 ***	.52 ***	R自尊感情	.63 ***	.56 ***	.42 ***	—	.69 ***	.52 ***
R自己効力感					—	.47 ***	R自己効力感	.53 ***	.78 ***	.36 ***	.66 ***	—	.47 ***
R進路選択自己効力						—	R進路選択自己効力	.37 **	.33 **	.65 ***	.53 ***	.47 ***	—
*** $p < .001$ ※Rは2回目の結果							*** $p < .001$ 、** $p < .01$ ※Rは2回目の結果						
2Q	自尊感情	自己効力感	進路選択に対する自己効力	R自尊感情	R自己効力感	R進路選択に対する自己効力	2Q 上段：男性 下段：女性	自尊感情	自己効力感	進路選択自己効力	R自尊感情	R自己効力感	R進路選択自己効力
	自尊感情	—	.58 ***	.69 ***	.71 ***	.59 ***		.62 ***	自尊感情	—	.76 ***	.81 ***	.70 ***
自己効力感		—	.53 ***	.50 ***	.77 ***	.42 **	自己効力感	.42 *	—	.74 ***	.72 ***	.80 ***	.57 **
進路選択自己効力			—	.54 ***	.65 ***	.61 ***	進路選択自己効力	.48 *	.24	—	.61 **	.71 ***	.72 ***
R自尊感情				—	.57 ***	.40 ***	R自尊感情	.71 ***	.37	.46 *	—	.69 ***	.50 *
R自己効力感					—	.53 ***	R自己効力感	.45 *	.73 ***	.53 *	.45 *	—	.60 **
R進路選択自己効力						—	R進路選択自己効力	.50 *	.29	.44 *	.22	.45 *	—
*** $p < .001$ 、** $p < .01$ ※Rは2回目の結果							*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$ ※Rは2回目の結果						

## 4-5. 各尺度の授業前後の平均値の比較 (1Q、2Q)

各尺度について授業前後の変化を調べるために、1Q、2Qにおける授業前後の平均値の差を対応のあるt検定を用いて比較した。さらに、得られたデータの効果量を調べた。

その結果、自尊感情は、1Qでは1%の有意差 ( $t(169)=-3.215, p<.01$ ) で、小から中程度の効果 (.24)、2Qでは1%の有意差 ( $t(48)=-3.041, p<.01$ ) で、中から大程度の効果 (.40) が見られ、授業後の方が高かった。自己効力感は1Qでは有意差はなかった ( $t(169)=-1.732, n.s.$ ) が、小さい効果 (.13)、2Qでは1%の有意差 ( $t(48)=-3.218, p<.01$ ) で、中から大程度の効果 (.45) が見られ、授業後の方が高かった。進路選択に対する自己効力は、1Qでは0.1%の有意差 ( $t(169)=-4.080, p<.001$ ) で、中程度の効果 (.30) が、2Qでは0.1%の有意差 ( $t(48)=-4.699, p<.001$ ) で、中から大程度の効果 (.56) が見られ、授業後の方が高かった。以上の結果から、全項目で授業前より授業後が高い効果が見られた。また、1Qと2Qを比較したところ、2Qの方の効果が高いことが示された。結果を表12に示す。

表12 授業前後の自己評価の比較 (対応のあるt検定)

	対応サンプルの差		結果
	平均値	標準偏差	
1Q 自尊感情	-1.40	5.68	$t(169)=-3.215, p<.01$ .24 小-中 前<後
1Q 自己効力感	-0.38	2.83	$t(169)=-1.732, n.s.$ .13 小 前<後
1Q 進路選択自己効力	-1.47	4.68	$t(169)=-4.080, p<.001$ .30 中 前<後
2Q 自尊感情	-1.98	4.56	$t(48)=-3.041, p<.01$ .40 中-大 前<後
2Q 自己効力感	-1.22	2.66	$t(48)=-3.218, p<.01$ .45 中-大 前<後
2Q 進路選択自己効力	-3.29	4.89	$t(48)=-4.699, p<.001$ .56 大 前<後

効果量：0.1小、0.3中、0.5大

## 4-6. 2Qの授業前後の県内外出身者別自己評価の比較 (対応のあるt検定)

県内と県外出身者に分けて授業効果を調べるために、各尺度について授業前後の平均値の差を対応のあるt検定を用いて比較し、効果量を調べた。出身が分かるのが2Qだけのため、分析は2Qのみで行った。

まず、県内出身者の自尊感情 ( $t(12)=-883, n.s.$ ) と自己効力感 ( $t(12)=-1.678, n.s.$ ) では有意差が見られなかった。進路選択に対する自己効力は5%の有意差 ( $t(12)=-2.652, p<.05$ ) で、授業後の方が高かった。効果量は順に .25、.44、.61 で、小から大程度の効果が見られた。県外出身者の自尊感情は1%の有意差 ( $t(33)=-2.757, p<.01$ ) で、自己効力感は1%の有意差 ( $t(33)=-3.052, p<.01$ ) で、進路選択に対する自己効力は1%の有意差で ( $t(33)=-3.674, p<.05$ )、授業後の方が高かった。効果量は順に .43、.47、.54 で、中から大程度の効果が見られた。以上の結果から、県内出身者も県外出身も授業効果は各尺度で小から大の効果が得られ、僅かに差はあるものの出身に関わらず効果があることが示された。結果を表13に示す。

表 13 県内外出身者別授業前後の自己評価の比較（対応のある t 検定）

2Q	県内		県外	
自尊感情	$t(12)=-.883, n.s.$	.25 小-中 前<後	$t(33)=-2.757, p<.01$	.43 中-大 前<後
自己効力感	$t(12)=-1.678, n.s.$	.44 中-大 前<後	$t(33)=-3.052, p<.01$	.47 中-大 前<後
進路選択自己効力	$t(12)=-2.652, p<.05$	.61 大 前<後	$t(33)=-3.674, p<.01$	.54 大 前<後

効果量：0.1小、0.3中、0.5大

#### 4-7. 1Qにおけるオンライン授業に対する学生の評価と授業効果への影響

今年度は1Qの4回目からオンライン授業となり、2Qは対面授業に戻った。授業形態による効果への影響を調べるために、社会人の講話を聞く授業に関しての授業形態の希望を、対面、オンライン、どちらでもよいで回答を求めた。その結果、対面が38名（31.4%）、オンラインが61名（50.4%）、どちらでもよいが22名（18.2%）であった。大規模クラスで講話を聞く授業では、オンラインであってもリアルタイム配信であれば不都合を感じていないことが示された。しかし、中には、「学校に行くのがしんどいから」「楽だから」など消極的な理由（10名程度）も散見されたことは今後の参考にしたい。

## 5. おわりに

本研究では、香川大学におけるキャリア教育特別設計講義である、「地域で活躍する職業人に学ぶ」を受講した学生の働くイメージの醸成とキャリア意識の育成、県内就職希望度の向上を測るとともに、受講前後の心理的变化による授業効果の検討を行った。

### 5-1. 授業内容の検討

本授業によって、職業観や生き方のイメージの醸成、大学生活におけるキャリア形成に関する意識の向上に大きな効果が見られ、香川県内就職希望度も中程度の効果が得られた。

働くイメージの醸成とキャリア意識の育成、県内就職希望度は、全学部で概ね向上が見られたが、学部間の伸びの比較から、経済学部の職業観とキャリア観の育成が課題であることが示された。このことから、グループ活動などに学部別構成は必要ないが、個人の結果と全体を見ながら原因を探り、さらに効果的な授業内容へと改善していく必要がある。

1Qと2Qでは、179名と60名という受講人数の差、オンラインと対面という運営の違いがあった。クラスの規模が大きくなると「学生の意欲」、「内容の理解度」、「総合的満足度」が低下する傾向があり、クラス規模が100人を超える段階では教育効果に関する項目については上昇する（中井、2006）ことが報告されているが、本授業では1Qと2Qの授業満足度には大きな差は見られず、効果に関しても中規模の人数である2Qの方が高いなど、クラス規模の大小で先行研究と異なる結果となった。しかし、1Qの大部分がオンライン授業であったことを考慮するならば、2Qの効果の大きさは、クラス規模というより、オンラインと対面という形式によるものではないかと考えられる。オンライン希望者の半

数に「ゲストも生徒（ママ）も楽だから」「気軽に聞けるから」「学校に行くのがしんどいから」というような、学習意欲が低く怠慢さが表れた記述が見られた。対面でグループワークが多かった2Qの効果が大きかったこと、オンライン受講者（1Q）に消極的態度の者が一定数いることなどから考えると、クラス規模に関係なく、受講意欲が授業効果に影響すると考えられる。

### 5-2. 心理的变化について

本研究では、授業前に比べ授業後で自尊感情、自己効力感、進路選択に対する自己効力が向上することが示された。社会人講話を取り入れた授業については、吉田・原田（2018）が大学生の職業キャリア・レディネスの計画性が高まることを報告しているが、本研究でも類似の結果が得られた。これは、授業を通して自己理解が深まり、肯定的に将来のイメージを明確化することによって自尊感情が高まったこと、OPPA使用による自身のキャリアイメージをメタ認知向上が自己効力感を向上させ、進路選択自己効力の向上に影響したと考えられ、原（2019）のキャリア教育の効果検証のモデルを支持する結果であった。

### 5-3. 県内就職について

本授業は香川県との連携事業であり、将来の県内就職希望者を増やすことが目的の一つであったが、受講後に県内就職希望度が高くなっており、概ね教育効果が見られたと言ってよいであろう。受講後の香川県内就職希望度は、出身地別では、全地域において高くなった所もあり、地域でまとめることはできなかった。むしろ、個人内変化が見られる結果であり、出身地に関わらず受講により香川県に興味関心を持ち、就職先としての選択肢になる可能性が十分あることが示された。しかし、香川県出身者の県内定着の意識が弱い傾向が見えたことは注視すべき点である。1Qにおいて香川県出身者の伸び率が低かったことを合わせて考えるなら、2Qの現象は予想の範囲であった。香川県内企業や地方公共団体等に関心を抱かせるという授業効果を期待するのであれば、全体で約30%近くを占める香川県内出身者に対してより有効な講義内容にする必要があり、重要な検討課題であろう。一方で、初年次に県外の企業や産業に興味関心を広げることはキャリア発達にとっては必要であり、最終的により強い意志を持って県内就職を希望するための初歩的段階とも考えることができる。

### 5-4. まとめと今後の課題

以上の結果から本授業による教育効果が概ね確認できた。県内就職希望度の向上と具体的な課題の明確化に貢献できたことは、今回の調査の成果であると考えられる。受講によって、学生が将来について「何をしたいのか、そのためにはどんな業界・職業に就くのがよいのか、それはどこなのか」を考えるヒントになることを期待する。そのためには、ここで得られた学びをより広げ深める作業が必要である。今後は、広がった興味関心をさらに深めるた

めに、問題解決型などの授業の受講が望ましい。

本授業は、授業の途中からオンラインとなり、アンケート調査の方法も内容も変更する必要が生じた。よって、1Q では年齢や性別が聞かれていないために、効果の測定が出来なかった。OPPA についても最初の用紙への記入から、Moodle への提出に変更となり、学生のメタ認知育成に影響がなかったとは言えない。また、2Q の授業は対面であったためにグループ活動が活発に行え、学生によるグループ発表まで実施できた。このように1Q と 2Q と単純に比較できない状況に陥ったために、手法が統一しない箇所もある。今後は、できるだけ条件を統一した運営を図りたい。また、授業効果については、他のキャリア教育の授業科目との比較検証、さらには他大学との比較も視野に入れた効果検証を継続していく必要がある。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様、香川県商工労働部労働政策課の皆様へ感謝いたします。

## 注

- 1) 本研究は、香川県に提出した、「2021 年度開講授業キャリア教育特別設計講義「地域で活躍する職業人に学ぶ」アンケートの集約結果と次年度に向けた改善案について」に加筆修正したものである。

## 参考文献

- Bandura. A. (1977). *Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change*. *Psychological Review*. Vol. 84, No. 2, 191-215.
- 原瑞穂 (2018) 「キャリア教育における OPQA 論の効果」『山梨大学教育学部紀要』第 27 号、237-256 頁。
- 原瑞穂 (2019) 「大学におけるキャリア教育の授業の効果：一枚ポートフォリオ評価法 (OPQA) を用いた授業から」『キャリアデザイン研究』15、141-150 頁。
- 原瑞穂 (2021) 「本学のキャリア形成科目 N の授業効果の検討：資質・能力と自己効力感に着目して」『高等教育と国際化：山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』(6)、29-35 頁。
- 堀哲夫 (2013) 「教育評価を問う」『一枚ポートフォリオ評価 OPQA 論 一枚の用紙の可能性』株式会社東洋館出版社、21、92、112、114-164 頁。
- 川合智之 (2021) 「普通科高校のキャリア教育における効果：社会人講話が生徒のキャリア発達に与える影響に着目して」『静岡大学教育研究』(17)、95-110 頁。
- 文部科学省 (2011) 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)』 ([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm)) < 2022 年 2 月 15 日アクセス >

- 中井俊樹 (2006) 「クラス規模は授業にどのような影響を与えるのか」『名古屋高等教育研究』 6、5-19 頁。
- Rosenberg、M (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press
- 坂野雄二・東條光彦 (1986) 「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」『行動療法究』 12 (1)、73-82 頁。
- 浦上昌則 (1995) 「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』 42、115-126 頁。
- 浦上昌則・脇田貴文 (2016) 「項目反応理論を用いた進路選択に対する自己効力尺度短縮化の試み」『アカデミア・人文・自然科学編』 (12)、67-76 頁。
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』 30 (1)、64-68 頁。
- 吉田尚子・原田章 (2018) 「社会人講話が大学生のキャリア意識に与える影響: 職業キャリア・レディネスの変化に着目して」『日本教育心理学会総会発表論文集』 60、464-464 頁。